氏名	野間　愛
ヨミガナ	ノマ　アイ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第347号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　ロッシーニの「ベル・カント」―レトリックの視点から―
	〈演奏〉　G.Rossini　オペラ「セミラーミデ」より抜粋　No.2　“Eccomi alfine in Babilonia”ほか
論文等審査委員	
（主査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　永井　和子
（副査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　福中　冬子
（副査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　櫻田　亮
（副査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　大塚　直哉
（副査）	東京藝術大学　准教授　（音楽研究科）　萩原　潤
（副査）	中島　郁子

（論文内容の要旨）

この論文は西洋音楽における「レトリックRhetoric（修辞法）」の伝統を振り返りつつ、ジョアキーノ・ロッシーニGioachino Rossini（1792-1868）にとっての「ベル・カント」がそのような伝統の上にある、ということを演奏実践から得られた知見を基に論じたものである。

第１章では、ロッシーニの時代の「ベル・カント」がバロックの歌唱に由来する、とする先行研究の知見を出発点に、バロック期の、特にドイツ語圏の音楽家たちの理解していた「音楽におけるレトリック」の伝統を概観した。

第２章ではロッシーニの「ベル・カント」における「レトリック」の伝統との関係を明かすために、第１節ではロッシーニの音楽学習歴において、第２節では実際の作品の中において「レトリック」の伝統との関わりを考察、第３章ではチェレッティの見解を基にロッシーニの求めた「ベル・カント」について考察した。

第３章ではロッシーニの「ベル・カント」を「レトリック」の視点から見たことで導き出された歌手が備えるべき声、技巧、弁論家としての歌唱の３点を挙げ、実践研究を通して検証を行った結果と自身の見解を例として挙げた。第１節ではロッシーニが好んだ声を手に入れるために不可欠な横隔膜による発声の方法と訓練について、第２節では歌手自身によって磨かれるべき技巧をロッシーニが理想としていたと考えられるカストラート歌手の声楽教本からのヒントを得て書き出し、ロッシーニの遺した練習曲集を通して技巧修得の手段としての考察を行った。第３節では音楽の弁論家としての歌唱を目指して行った実践の記録としてオペラ《タンクレーディ》の第３番、タンクレーディ登場の際に歌われるカヴァティーナを例に挙げ、実践の記録と考察を記した。

弁論の技法としての「レトリック」を作曲に取り入れようとする様々な試行錯誤の歴史の中で、多くの音楽家が取り組んだ音楽運動による聴衆の情念喚起への挑戦の上にロッシーニの求めた「ベル・カント」があること、それを実現する歌唱は、弁論家のように聴衆の心に訴える豊かな表現を備えた声を、神からの賜物である音楽に乗せ、さらに演奏者の音楽に対する忠実な心によって磨き上げられた美しい音色と、歌唱の技巧を用いて歌われるものである、ということを結論とした。

（総合審査結果の要旨）

申請者、野間愛博士学位演奏会ではG.ロッシーニ最後のオペラ作品〈セミラーミデ〉のアルサーチェ役を演唱。このコロナ禍において多くの制約を強いられる中で３名の助演の協力を得、奏楽堂オーケストラピットには２台のピアノ、舞台はパーティションで仕切られた空間ではあったが演出付きのオペラ上演というに等しい在り方での本番を行った。

フィオリトゥーラの高度な技術を要する、メゾ・ソプラノ（コントラルト）にとっては恐らく最難の役柄と言えるアルサーチェを、またそれ故に上演機会の少ないこの作品を高い水準で演奏したことは最高の評価に値する。この作曲家の求める歌唱に必要不可欠で的確な技術、男性役を演ずる上で情緒を伴った美しく柔らかな音色の中に要求される力強さを打ち出して見事であった。重唱に関しては経験値豊かな共演者に支えられ他では望めない程の美しいハーモニーを産み出すことに成功した。また、特に今回の演奏において伊語発音の上達、言葉の表現力が一段と美しく洗練されたことが審査会でも絶賛された。申請者の博士課程在籍中での諸技術の向上を示しているが、言葉の表現は発声との密接な関わりを持ち、またあまりに難易度の高いこの作品と対峙することになったことから論文執筆の研究テーマの焦点が絞られていった。

論文題目でもある「ベル・カント」・・・これまでその真意は深く、曖昧にしか受けとめられなかった申請者は、ロッシーニが口にした「ベル・カント」に向き合うこととなるのである。定義する事がほぼ不可能であるこの「ベル・カント」とは何か？　との問いがスタートとなり追求が始まる。そこで打ち出される「バロック時代に生起したベル・カント」。これは論文の前提として実証可能な検証の上に成り立たない点が問題となるのだが、ここで「レトリック」と出会うのである。レトリック・・・これもまたベル・カント同様、ヨーロッパ文化史定義において非常に大きすぎるテーマと向き合うこととなった。この壮大な二つの巨壁を前に本人なりに可能な限り「レトリック」について調べた痕跡は見えるものの、レトリックという音楽を含む芸術のみならず、ヨーロッパの言表文化の長い歴史を下支えしてきた概念を全て邦文二次文献のみを通じて論じられており、博士論文としては深みに欠ける。

対して第３章の歌唱実践に関するより現実的な考察は、若手歌手にとっての有用なガイドライン的意義を持つものと言える。そしてこれが当日の演奏会を通じても明解な実践結果として聞き手に強い説得力を放ってくるのである。どちらかと言えばブッファに焦点が集まりがちなロッシーニだが、彼の作品は様々なレベルにおいて19世紀セーリアの雛形を確立した立役者の一人である。一見無意味に聞こえる反復や走狗のフィリング等も舞台上での申請者自身の身体を通して放たれる演唱を聴いて初めて明らかになる効果もあり、論文執筆の研究は演奏の確かな裏付けとなっていた。博士論文として、時に言葉が足りないものの、演奏者の角度からの主張がしっかりなされている。論文としては集成の余地はあるものの、演奏と併せて評価するならば、申請者自身の研究動機はしっかりと明言されていると言える。

以上の理由から、審査会では全会一致で合格とした。